

No. 2



2001.6

(目次)

● 卷頭言

京都大学と教育学部・同研究科の 変遷に思う	研究科長・学部长	中山康裕	2
--------------------------	----------	------	---

● 在外研究ノート

スイス便り	心理臨床学講座 助教授	河合俊雄	3
-------	-------------	------	---

● 研究ノート

教官から	教育学講座 教授	山崎高哉	4
院生から	比較教育政策学講座D2	門沼太郎	4

● 事務室より

「雑感」	教務掛長	寺田秀世	5
------	------	------	---

● 図書室より

「資料探しに困ったら図書館へどうぞ」	図書掛	福井京子	5
--------------------	-----	------	---

● 臨床教育実践センターから

センター運営委員	徳岡秀桂	6
----------	------	---

● 心理教育相談室から

相談室長	伊藤良子	6
------	------	---

● 諸記録

① 入試結果 ② 学位授与件数 ③ 教育職員免許状取得状況 ④ 人事異動 ⑤ 招へい外国人研究者の記録 ⑥ 留学寄付金の受入 ⑦ 科学研究費補助金	7
--	---

● 諸報

新任教官、事務官紹介	9
------------	---



巻頭言

京都大学と教育学部・同研究科の変遷に思う

教育学研究科長・教育学部長 山中康裕

京都大学は、国の政治動向などと直結した東京大学とは、一味も二味も異なった、豊かな自然と高度な文化風土とを背景として、自由で独自な学風を伝統として、我が国二つ目の帝國大学として創立されて以来、湯川、朝永、福井、利根川氏らのノーベル賞や、広中氏のフィールズ賞などの受賞を象徴的な事例として、わが先達らがかずかずの輝かしい業績をあげてこられた実績がある。本学の歴史もすでに100年を超し、今年から21世紀に入って足掛け3世紀に亘ることとなつたいまも、日に目に着実に変化発展している現状がある。

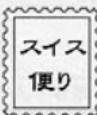
今、京都市西方の桂キャンパスに工学研究科の大規模な移転計画が進行中であるが、現在エネルギー理工学研究所や食料科学研究所、防災研究所などのある宇治キャンパスには、戦後いち早く新制大学として再発足した時に創立され、やはりすでに50年を超すこととなつた教育学部も、かつての教養時代にはそこで机を並べて学んだものだった、あの頃の宇治校舎の周りは大根畠と茶畠の畝が続くばかりだったと、筆者が赴任した20年前には、今は亡き藤本浩之輔教授（教育人間学）や、故百名盛之教授（視聽覚教育学、この講座はすでに廃止され、教育認知心理学講座へと発展解消した）らが語っておられたことを懐かしく思い出す。そこは戦時の彈薬庫跡で、筆者赴任当時もまだ教育学部の心理実験器具などが保管されていたこともあり、いつ不発弾が爆発するかおつかなくて重いものはうっかりと落とせなかつた、という話だったから実際に隕石の感がある。かつての胸部研が再生医学研となり、情報学研究科や生命科学や融合科学など、どんどん新しい巨大プロジェクト計画が新設計立案され、京都大学が勇躍発展していくことは實に喜ばしいことだが、第7ステージへと延び延びになっている教育学研究科や教育学部の移転計画は、いつのまにか遅かに遅れをとつて、もはや私の在任中には不可能となっている体た

らくである。

私が赴任したころは10年後、つまり、いまから10年前には実現可能との話だったのである。

桂進出計画が前面に出たころ、教育学部のそれらは一時期完全に忘れ去られていたことがあったが、筆者が評議員だったときそれについて発言し、いま再び俎上に戻ったけれど、時すでに運びの感は否めない。また、今は総合博物館となってすでに新館が建設され新らしい景観を誇っているあの土地は、かつて、われわれが赤レンガと愛称していた建物があった。これは、かつて学部図書館、ついで、W2教室や心理教育相談室諸施設等と幾度か変遷したが、百名先生と私との当時の概算要求提出予定計画では、あそこに五階建ての本館を建て、今の旧文学部東館に間借り状態の、臨床教育実践研究センターの諸施設ばかりではなく、五階には、400名収容の大教室計画もあって、ここ数年来ずっと文学・総合人間・理学など他学部他研究科への間借りばかりの入学試験や、いま開講している私自身の全学開講科目の講義が、あの絶人のEIIでも席が足らず、むせ返るよう多く勢の地べたりあんや、窓の外から受講する風景も、あれなら一切不要な筈だったし、自家での学会開催も可能だったのに、と無念でならない。無論、こうした過ぎ去った過去を悔悟するのみでは無意味であり、近い将来、この京都大学にも必ず試験の波が訪れる独立法人化において、今度こそは遅れをとるどころか、率先して他研究科をリードしていく実効計画を推進していかねばならないと考えている。そのためには、本学研究科・学部に今ともに働く同僚諸先生の奮起やご努力はもちろんのこと、毎年激励として入学してくる若い諸君のエネルギー、新鮮でかつ力の溢れる創造性に富んだ斬新なプランやアイデア等が必須なのである。おおいに期待したいものである。

在外研究ノート



心理臨床学講座
助教授 河合俊雄

昨年の9月5日より、今年の7月4日まで、スイスのチューリッヒ郊外にあるユング研究所で在外研究の機会を与えられている。10ヶ月は長いようで短く、もう後2ヶ月足らずになってしまった。

ユング研究所で何をしているのか、というのはこちらに住んでいる人からもよく聞かれる間である。自分の場合は分析家の資格も取ってしまっているし、一応研究所からの招聘状はあって、講義やセミナーをすることはあっても、他に特に何ということもないということが正直なところである。本来ならばチューリッヒ大学に在籍するところであろうが、かつて学んだ人間学的・哲学的心理学の講座は消滅してしまっている。正確に言えば、「一般心理学」という講座自体は昔のままであるけれども、それは生物学的な方向の教授によって占められてしまっているのである。

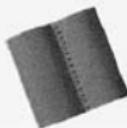
これは現在のヨーロッパの心理学の状況をかなり象徴的に示していると思われる。アメリカのような業績主義、実証主義の強まりによって、自然科学的な方向の心理学の方が強くなってきている。それは必ずしも心理療法自体が認められていないことではない。心理療法はヨーロッパ各国で国家資格化され、あるいはその方向に進んでいて、それに伴い保険が適用されるようになってきている。しかしながらそれはいわば両刃の剣であって、早く目に見える効果を求める圧力が心理療法に対して、あるいは心理療法の中でも強まってきている。本来の分析的な考え方というのはもはやメジャーではないし、学問的・理論的にも停滞しているように思われる。これは在外研究に来た者にとって残念なことである。

しかしながら個人的な関係を通じての同僚とは、いろいろと議論したり、意見を交換する機会に恵まれた。英語やドイツ語で書いたり、研究会や講

演で発表したりということがあって自分なりの考えを深めたり、考えなおしたりできたことは収穫だったと思っている。逆にどうして日本でそのようなことが可能でないのかは考えさせられることがある。それに付け加えてのことであるが、ヨーロッパの同僚たちの生活を見ていると、仕事と休みのリズムがはっきりしていて、年に何回かの1、2週間の休暇をとる。遊びに行くこともあるけれども、多くの人は山荘などにこもって、読書、執筆の合間にハイキングにでかけたりしている。日本での休みのない暮らしは一体何なのだろうという思いになる。

今回スイスで暮らしてみて、通信状況の変化には驚かされた。まず電話代が安くなっていて、特に日本・スイス間の国際電話は10年前の十分の一以下である。30分電話しても1,000円かかる。さらにはメールによって、様々な連絡は非常にやりやすくなった。まさにグローバル化、国の間の距離の消滅を感じさせられる。これは心理療法にも反映していて、メールと電話によって、遠く離れた人を分析したり、スーパーヴァイズをしていたりという同僚が多い。

しかし通信状況の変化はよいことだけではないだろう。たとえば治療関係も変わってしまうであろうし、私に関しては、おかげで日本からいくらでも仕事がまわってくることになってしまった。在外研究の大半はたまっていた仕事と、また新たに頼まれた仕事の処理に追われていた気がする。そのせいもあって、もっと落ち着いてテキストを読み、研究をしようと思っていたのだが、思ったほど進まなかつたのが残念である。残り2ヶ月の期間を、なるべく有意義に過ごせるようにしたいものである。



研究ノート



20世紀日本の教育哲学

教育学講座教授

山崎 高哉

新世紀はあらゆる面で濃い霧に包まれて幕を開けた。将来への展望が開けないという点で、教育哲学をめぐる状況も変わりがない。そんな危機的状況を打開する何らかの手がかりを得るために、過ぎ去った世紀の教育哲学の遺産から学ぼうと、中国の教育学者石中英博士（北京師範大学）が欧米や日本の学者に呼びかけて、「20世紀教育哲学的回顧与前瞻」という書物を編纂されるという。不思議なご縁で標題の題で私に執筆依頼が来た。中国語に翻訳したものを今年の9月末までに送るようにとの注文は多忙な身にはいさかきついが、しかし、私は引き受けた。私自身、石先生と同じ思いを抱いていたことに加え、20世紀日本の教育哲学は海外教育思潮の紹介と解説に忙しく、自ら発信することが極めて少なかったので、この際、

そのような教育哲学の在り方を再検討して、その長所短所、今後の展望について中國の人たちに語るものが必要なことであろうと考えたからである。

早速、谷本富、吉田熊次、中島半次郎、小西重直、篠原助市、入澤宗壽、稻毛金七、長田新、木村素衛、石山脩平といった戦前に、または戦前から活躍した教育学者について調べ、次いで、戦後に活躍し始めた梅根梧、下程勇吉、勝田守一、森昭、大田亮、上田薰、村井実、細谷恒夫等の著作の主なものを読み終えたところである。あとは20世紀後半に登場した人たちの主要著作を読破する仕事が残されている。

序でに、20世紀後半の研究動向を知るために、1959年に創刊された『教育哲学研究』にどのような人物やテーマを扱った論文が掲載されているかを調べてみた。圧倒的多数はドイツ語圏の哲学者や教育学者を取り上げたものであり、米国、日本と続く。個人研究ではデューアイ、ペスタロッチ、ヤスバース、そしてヘルバートとシュブランガーの類になっている。近年、課題を設定して多角的に論じた論文が増加傾向にあるのが注目される。



「教育の情報化」と教育政策

比較教育政策学講座D2

開沼 太郎

いわゆる“Windows”ブームによって、パソコン・コンピュータが爆発的普及を見せたのは、時まさに世紀末、数年前のことであった。この動向に背中を押される形で社会に押し寄せた「情報化」の波は、教育現場にも大小様々な影響をもたらし、その勢いは今やとどまるところを知らない。

「教育の情報化」は、情報通信技術の手段としての活用を主とした「現場（自体）の情報化」と、「情報リテラシー」の向上を主眼とした「情報化に対応するための教育」の二つの側面から捉えられる。これら二側面に基づく「教育の情報化」は、緊急性の高い課題として、主体を問わず対応が要請されている。

現在の「教育の情報化」は整備段階として緒に就いたばかりであるが、こうした「情報化」の各

発展段階には、それぞれに応じた適切な資源配分が存在すると考えられる。そこで私は、「教育の情報化」に関して、現段階での政策および資源配分の適切性や教育行政の果たすべき役割について、分析および評価を行うことを喫緊の課題と捉え、特にコンピュータ・ネットワークの管理体制に注目して研究を行っている。ネットワークは現在の「情報化」の鍵の概念であり、中でもその構築や管理の重要性は日々増大している。私自身も現在教育学研究科のサーバ管理を担当しており、表出する諸問題への対応からその重要性を体感する毎日である。総括すれば、現在の「情報化」は

“Computerization”と呼称されながらも、実際は管理体制、とりわけ「人的資源」の問題が注視されねばならない段階と判断できよう。

以上のような教育政策上の諸課題について、理論と実践の両面から、事例の検討や比較、計量的手法等の様々な形態を探って検証を試みる本講座の研究スタンスを生かし、研究活動に臨む所存である。

「雑感」

京都大学では、学部に入学するときに「誓詞」という書類に署名をして、提出してもらうことになっています。「誓詞」には、「京都大学学生たることを自覚し、修学の実をあげるよう努力をすることがあります。」となっており、なにか意味深いものを感じるのではないかでしょうか。京都大学に入学し、在学中、あるいは卒業された皆さんは、手続き書類のなかのこの「誓詞」をはじめて見た時、どういうことを感じたでしょうか。また、どのような気持ちで署名したのでしょうか。その時から多少、あるいは遙かに時間を感じます。この意味の感じ方に変化はないでしょうか。今一度思い返して、今後の生き方に再度誓いをたててみると、今後の励みになるのではないかと思います。

現在教務では、大学事務職員の教育・研究支援全体の位置付けのなかで、学生・一般の側に開いた窓口を持って、特に学生の修学に関する支援を担っています。最近では教育機会の拡充、学生サービス向上などの社会情勢の変化につれ、入試方法の増加、各種身分の学生受け入れ、単位互換、既習得単位認定など、新しい業務が増加し、合理化の必要性に迫られています。その中で、学生に関して



事務室より

教務掛長
寺川秀世

わることのできる時間が確実に減少しており、教務本来の役割を見失いかけてはいないかと感じる今日この頃です。

私もなにかと社會變化に惑わされる今日この頃ですが、教務本来の役割を引き続き考えていくとともに、「修学の実をあげるよう努力している学生を応援し、援助を惜しまないよう努力いたします。」と心の中で誓いをたて、励みにしたいと思います。

ちなみに、大学院入学生的「誓詞」には、「修学の実」が「学术研究の実」となっていますこと、付け加えさせていただきます。

「資料探しに困ったら図書館へどうぞ」

私は図書館の仕事が大好きです。

図書館に勤めるようになってから「図書館員に通じている人」という前川恒雄さん（元滋賀県立図書館長）の文章を読み、一つだけ当たっていることがありました。それは「人間が好き」であるということでした。

図っている人がいると、すぐに助けたくなりますが、自分に実力もないくせに、助けたいという気持ちが勝ってしまう、所謂、「おせっかい」なのです。

これも困ったもので、自分の手に負えないといふ、他人に助けを求める、直接関係のない人まで巻き込んでしまいます。そして自己嫌悪に陥ってしまうのです。そこで、やめておけばいいのに、性格がそうさせるのか、自己嫌悪の反省が薄れるころに又、その虫がむくむくと動き出します。本当に困ったものです。

“いまの時代には合わない人間だなあ”と自分でも常常思いますが、そうした性格に向く職業の一つが図書館員の仕事なのです。私の天職であると信じ、これからも続けていきたいと思っております。

図書という直接、利用者に接する担当者として、説教は許されません。難しい質問に、それも即座



図書室より

図書掛
福井京子

に答えなければならないとなると、その質問の意味を的確に捉えられる技量が要ります。質問にも、漠然としたものもあり、その人と一緒になって整理し、より適した本や論文を提供できた時は、ほっとします。利用者も本当に嬉しそうに閲覧室を出て行かれます。その時は図書館員冥利に尽きます。それが図書館員を続ける力になっています。

そんな私にも近頃、悩みがあります。

レファレンス以外の仕事が増え過ぎて、レファレンスに使える時間が少なくなったことです。その分、私の喜びも落つつつあります。

でも、こんな図書館員を喜ばすために是非図書館を利用させていただきたいのです。

ただし、貸し出し期限を守らない時と、図書を紛失した時は、「怖い図書館員」になることをお忘れなく。

臨床教育 実践研究センターから



センター運営委員
徳岡 秀雄

附属臨床教育実践研究センターの事業の一つに、教育現場で教育相談に携わる職業人を対象とする「リカレント教育講座」の開催がある。センター開設以来、年1回2日間にわたって開催してきたが、去る2月16・17日には第4回目を迎えた。

毎回、定員の100名を大幅に上回る、現職教諭やスクールカウンセラー、養護教員、教育研究所職員等からの受講希望がある。申し込みに際しては全員、検討を希望する事例の概要を提出することになっていることもあり、分科会での議論も

活発である。今回は、おとなしい子どもが突然「キレ」る、教室で着席していられない、といった事例が中心であった。2日目はシンポジウムで、「衝動的な子どもたち」をテーマに、精神科医の山口直彦・病院長が自らも関わられた少年凶悪犯の事例を基に、臨床心理士の岩宮恵子氏はスクールカウンセラーとして、弁護士の瀬戸則夫氏も子どもの権利など法律的側面から、それぞれ経験に裏打ちされた自説を展開された。

司会をなさった山中康裕教授の話題にも和ませて、フロアからは悩みの核心に触れる発言が多くみられた。私も社会学の立場から感想を求められたが、ことが学校教育現場であるだけに、社会統制量の中で治療の論理だけが突出するのではなく、健全発達に関わる側も頑張らねばバランスを失するのではとの思いから、「楽観論」をぶつけた。病気治療と健康増進とは矛盾する側面もあり、悲観的な対応が悲観的な事態を招来する危惧もあるからである。

しかし終了後のアンケートでは、能天気に過ぎる、とか、学校の辛い現実を踏まえていない、といった反発も見られた。どう反論するか、目下思案中である。

心理教育相談室から



相談室長
伊藤 良子

地域社会に開かれた心理教育相談室が本教育学部に発足したのは1953年のことでした。以来、先達の長年の努力が実って、本相談室は1980年、国立大学において初めての有料の「心理教育相談室」として認可されるに至りました。

医学の領域以外で、国立大学にこのような形の国民に対するサービスの提供が認められたのは画期的なことでした。それは「心」の領域を対象とする臨床心理学の「臨床実践」の専門性が認められたことを示すものでもありました。以後、他の国立大学に、次々と有料の心理相談室が開設されました。その突破口を開いたのが本学部でした。今日も、総相談件数（年間約4700余）等において

他大学に大きく水を空けております。また、近年はとくに急を要する相談が増加しておりますので、できるだけ早く相談を開始するべく、院生を中心とするスタッフ全員が日々臨床活動に力を注いでいます。

臨床心理学においては、臨床実践こそが中核に位置づけられます。臨床心理学の研究は実践のための研究であると同時に、実践を基盤にして初めて可能になります。臨床心理学の研究は人間の一部分を対象化して行なうことはできないからです。全体的存在としての人間の出会いの場において臨床心理学の研究は深められると言えましょう。それゆえ、この出会いは、充分な訓練のもとに、慎重に行なわなければなりません。この出会いは、一回限りの、固有の出会いですが、その積み重ねから普遍的な理論が生まれてきます。先人の理論はこのようにして生まれてきたものです。すなわち、来談される方々とともにその問題や困難と出会いながら普遍的な理論が現れ出てきます。それはまた必ずや実践に還元されて行くのです。ここに、実践と研究の「場」である心理教育相談室の欠くべからざる重要性のゆえんがあります。

今後とも、皆様のお支えを頂戴致しく、よろしくお願い申し上げます。

諸記録

◆平成13年度入試結果

・教育学部

日程等	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	40	160	155	42	63
後期日程	20	155	94	21	
第3次編入学	10	79	77	8	8

・教育学研究科

課程等	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
修士研究者教育科学専攻	18	39	38	16	16
士養成コース臨床教育学専攻	14	90	89	15	15
課程教育科学専攻(修業コース)	10	41	40	10	9
臨床教育学専攻(第2種)	若干名	8	8	0	—
博士後期課程編入学	若干名	14	11	0	1

◆平成12年度学位授与件数

学位名等	授与者数
学士	教育学科 26
	教育心理学科 28
	教育社会学科 17
修士	教育科学専攻 18
	臨床教育学専攻 17
	教育学専攻 2
博士	課程博士 3
	論文博士 2

◆平成13年4月1日付人事

大学院教育学研究科長 山中康裕 (任期: 13.4.1~15.3.31)
 教育学部長
 評議員 天野正輝 (任期: 12.4.1~14.3.31)
 評議員 田嶺紀夫 (任期: 13.4.1~15.3.31)
 教育学系長 山田洋子 (任期: 13.4.1~14.3.31)
 教育心理学系長 同田康伸 (任期: 13.4.1~14.3.31)
 教育社会学系長 前田泰志 (任期: 13.4.1~14.3.31)
 研究科別研究会長 平野久 (任期: 13.4.1~15.3.31)
 新井孝喜 茨城大学教育学部(助教授)より転任

◆招へい外国人研究者の記録

アナッテ エルベ

Annette Erbe

現職 ドイツ連邦共和国ハル大学日本学セミナー研究助手・研究員
 活動内容 日本の教育の国際化に関する研究
 受入講座 比較教育政策学講座
 受入教官 江原武一 教授
 受入期間 12.12.1~13.11.30

◆教育職員免許状取得状況

平成8年度 (1996)

中学校専修免許状	1
中学校1種免許状	10
高等学校専修免許状	2
高等学校1種免許状	16
義務学校1種免許状	2
義務学校2種免許状	—

平成9年度 (1997)

中学校専修免許状	—
中学校1種免許状	20
高等学校専修免許状	—
高等学校1種免許状	23
義務学校1種免許状	1
義務学校2種免許状	—

平成10年度 (1998)

中学校専修免許状	1
中学校1種免許状	11
高等学校専修免許状	1
高等学校1種免許状	13
義務学校1種免許状	1
義務学校2種免許状	1

平成11年度 (1999)

中学校専修免許状	—
中学校1種免許状	15
高等学校専修免許状	1
高等学校1種免許状	18
義務学校1種免許状	1
義務学校2種免許状	—

平成12年度 (2000)

中学校専修免許状	1
中学校1種免許状	13
高等学校専修免許状	1
高等学校1種免許状	14
義務学校1種免許状	3
義務学校2種免許状	1

◆授学寄附金の受入

寄付金の名称	寄附目的	寄 財 者	研究担当者	備 考
岩井八郎助教授研究助成金	岩井八郎助教授の研究に対する研究助成	財団法人 カシオ科学振興財团	助教授 岩井八郎	
教育認知心理学講座研究助成金	柳見孝助教授・子安増生教授の研究に対する研究助成	財団法人 吉田秀雄記念事業財团	助教授 柳見 孝 教 授 子安増生	

◆科学研究費補助金

13年度

研究項目	研究題目	研究担当者
基盤B	大衆教育時代におけるエリート中等学校の学校文化と人間形成に関する比較研究	竹内 洋
基盤B	ネパールにおけるマージナルグループの教育様式の政治人類学的研究	前平泰志
基盤B	創発的思考における再帰とアナロジーの機構の認知心理学的研究	子安増生
基盤B	臨床場面における描画法の理論的・実証的研究 —画像データベース・システムの「観点探索ツール」開発とその発展的利用を通じて—	皆藤 章
基盤B	心理臨床家教育におけるスーパービジョンの方法と成果に関する多角的検討	東山絢久
基盤B	官民連携による教育行政改革の新展開に関する国際比較研究	高見 茂
基盤B	日豪の箱庭制作プロセスの比較研究	岡田康伸
基盤B	人生サイクルと他界イメージの多文化比較による生命観モデルの構築	山田洋子
基盤C	「総合的な学習の時間」と「総合演習」の接続・連携のためのカリキュラム開発と試行	新井孝喜
基盤C	教育における〈公共性〉に関する人間形成論的総合研究 —現代社会における教育責任の原理的基盤を求めて—	皇 紀夫
基盤C	心理臨床家の養成における「臨床実践指導」に関する開発的研究	森原勝紀
基盤C	アジア諸国における経済化機への教育的対応 —先端技術教育と価値教育の多国間比較—	杉本 均
基盤C	近世日本における教育のメディアに関する文化史的研究	辻本雅史
基盤C	表情および視線の認知機構に関する実証的研究	吉川左紀子
基盤C	指導要録改訂期における教育評価の問題	天野正輝
基盤C	転換期の高等教育における管理運営組織改革に関する国際比較研究	江原武一
萌芽	レトリック論による教育言説の創出に関する萌芽的研究 —教育詩学（ポエティック）に探求—	鈴木晶子
萌芽	かしこい市民を育むための経済学教育に関する教育心理学的研究	子安増生

諸報

◆ 新任教官・事務官・事務補佐員紹介（「 」内は本人の抱負）



編集後記

おかげさまで創刊号が好評を得て、その勢いを保って第2号を出すことができました。大変にお忙しい中、第2号に原稿をお寄せいただきました皆様にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

マス・コミが喧伝するように、大学をめぐる状況は激動の時代に入りましたと騒がれています。ただ、その「激動」の中身となると、私たちはそれほど明確に理解しているわけではありません。こんな時には、まさに「激動」の渦中にいる者たちが、お互いの立場や情報を率直に発信・交流して、しっかりと足場作りを行うことがまずは求められているように思います。その意味でのミニ・コミの果す役割は大きくなるでしょう。

ようやく歩き始めた小説。編集委員一同、ますますの充実をはかる所存。どうか皆様の恐懼のないご意見をお寄せいただければ幸いです。

(K. T. 記)

京都大学教育学研究科
・教育学部広報委員会(平成12年7月~)

委員長 高見 茂 助教授
(比較教育政策学講座)

委員 山中 康祐 教授
(教育学研究科長・学部長)

委員 田中 繁治 助教授
(教育方法学講座)

委員 柳見 孝 助教授
(認知心理学講座)

委員 宮谷 浩 事務長

委員 山根 大和 事務掛長

事務担当

教育学研究科・教育学部庶務掛
TEL 075(753)3003

表紙デザイン 山田句子